

令和 2 年 4 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03010

研究課題名（和文）鎌倉時代史研究の再構築に向けた『平戸記』新訂本の作成

研究課題名（英文）Drawing up a New Revised Text of Heikoki for Reconstruction of a Study on the Kamakura Period

研究代表者

吉江 崇 (Yoshie, Takashi)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：50362570

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、鎌倉時代史研究の基本的文献である『平戸記』について、信頼するに足るような新たな校訂本を作成し、研究の基盤整備を行うことを目的としたものである。これまでの研究で一般的に使用されてきた『平戸記』は、1935年に公刊されたものであり、その校訂には少なからぬ不備が存在した。そこで本研究では、現在まで伝わる『平戸記』の写本について調査を実施し、どの写本がよいテキストであるのかを確定させた上で、新たな校訂本を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が分析対象とした『平戸記』は、鎌倉時代中期に活躍した公卿・平経高（1180-1255）の日記である。そこには、当時の宮廷社会の動向や公武関係の様子を知る上で重要な記事が存在しているだけでなく、新たに興った浄土宗的信仰に基づく仏教儀礼や、漢学的な知識に関する情報も多く含まれている。『平戸記』の記載内容は鎌倉時代史を研究する上で欠かすことのできないものであり、信頼に足るような新たな校訂本を作成したことは、学術的意義が高いものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to draw up a reliable revised text of Heikoki, a basic literature on the Kamakura period, and to prepare the foundation of research. The text of Heikoki published in 1935 which have been generally used in studies leaves much faults in the way of revision. In this study, I newly revised this book with some handwritten copies which I determined better as a result of investigation of them.

研究分野：日本史

キーワード：日本中世史 史料研究 校訂

1. 研究開始当初の背景

『平戸記』は、鎌倉時代中期に活躍した公卿・平経高(1180-1255)の日記であり、鎌倉時代史研究の基本的文献の一つといえる。同時代の公家の日記としては、他に勘解由小路経光の『民経記』や葉室定嗣の『葉黄記』が存在するが、とりわけ『平戸記』は、後高倉皇統から後嵯峨皇統へといった朝廷の大きな転換点に相当する時期の記録であること、記主である平経高が、承久の乱後の親幕府派によって信任されたことにより、公武関係の記事が比較的多く存在すること、鎌倉幕府の基本文献である『吾妻鏡』が欠落する部分の記事を含み、幕府の史料を補うような情報をも提示し得ること、平経高が熱心な仏教信仰者で、なかでも念仏衆といった新興の仏教者と深い繋がりを持ったことから、社会に急速に広まっていった浄土宗的な仏教儀礼の記事が散見すること、など、他にはない特有の価値を有している。それゆえ『平戸記』は、これまで多くの鎌倉時代史研究が活用してきた第一級の史料である。

ところが、一般に利用される『平戸記』は、昭和10年(1935)に公刊された史料大成本で、これが現在までに刊行された唯一の活字本となっている。『民経記』の校訂本が平成18年(2006)に、『葉黄記』のそれが平成17年(2005)に、それぞれ刊行を終えたことと比較すると、その刊行は圧倒的に古く、そのことに起因して、校訂には少なからぬ不備が存在する。史料大成本『平戸記』における問題点としては、以下のような事柄を指摘しうる。

- (1) 『平戸記』には自筆本こそないが、南北朝期の書写と推定される伏見宮本9軸が存在し、これが『平戸記』に関する唯一の古写本である。しかし、史料大成本の作成にあたっては、この伏見宮本を利用しておらず、刊行直前に伏見宮家本と照合し、7頁にわたる正誤表を作成して伏見宮本との異同を示したに過ぎない。
- (2) 史料大成本が底本としたのは、修史局が流布本を増訂する形で作成した明治期の写本(内閣文庫所蔵18冊本)であり、江戸時代の流布本そのものを底本にしているわけではない。(表1参照)
- (3) 中院本や柳原本など、江戸時代の写本を対校本として用いているが、対校本がなく、底本が他本で校訂されないまま掲載されている箇所も存在する。
- (4) 逸文の集成が十分になされていない。

こうした状況に鑑み、研究代表者たちは研究会を組織して、平成22年(2010)4月以来、継続して研究会を開催し、唯一の古写本である伏見宮本の釈読作業を行いながら、『平戸記』新訂本の作成に取り組んできた。しかし、写本調査は十分ではなく、伏見宮本の対校本や伏見宮本が存在しない部分の底本の確定はできていなかった。また、校訂作業で蓄積されてきたデータも未整理の状態となっているものが多かった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、鎌倉時代史研究の基本的な文献であるにもかかわらず、上記の如き校訂に不備の多い『平戸記』に関して、信頼するに足るような新たな校訂本を作成し、研究の基盤整備を行うことにある。そのため、本研究においては、(1)伏見宮本を底本とした校訂本の作成、(2)写本調査の実施と底本・対校本の確定、(3)人名比定作業の実施、の3つの事柄を、研究期間内の主要な課題として設定した。

- (1) 伏見宮本を底本とした校訂本の作成  
『平戸記』に関しては、自筆本こそ存在しないが、南北朝期の書写本と目される伏見宮本9軸が存在し、これが唯一の古写本となっている。しかし、史料大成本『平戸記』は、この古写本を十分には利用しておらず、ここに史料大成本の最大の欠点が存在する。本研究では、この伏見宮本を底本にすえて、新たな校訂本を作成することを第一の課題とした。
- (2) 写本調査の実施と底本・対校本の確定  
『国書総目録』によると、『平戸記』の写本は54種類が存在する。このうち10冊以上の比

表1 史料大成本『平戸記』の底本と対校本

<b>【底本】</b>			
・内閣文庫所蔵秘閣本	国立公文書館所蔵	162-56	22冊
修史局が伏見宮本と九条家所蔵本によって、流布本を増補(明治21年(1888)最終補訂)			
<b>【対校本】</b>			
・宮内省図書寮所蔵藤波本	宮内庁書陵部所蔵	217-447	5冊
・同 柳原本	宮内庁書陵部所蔵	柳-280	3冊
・同 松岡本	宮内庁書陵部所蔵	270-612	9冊
・帝国図書館本	国立国会図書館所蔵	わ210.415	18冊
史料大成本は中院家旧蔵本と考えるが、中院本の書写本とするのが正しい			
・内閣文庫所蔵の別本三部	具体的にどれを指すかは不明		

較的まとまった写本は15種にのぼり、これらが伏見宮本の欠落部分を補い、また対校本となる可能性のあるものといえる。そこで、この研究期間においては、これら15種を中心とする写本の調査を実施し、写本系統を考察した上で、対校本ないし伏見宮本の欠落部分の底本となり得るような善本を確定することとした。

(3) 人名比定作業の実施

『平戸記』にかかわらず、日記を歴史資料として扱う際には、登場する人物がいかなる人物であるかを明らかにすることが、正確に読み解く上での基本となる。なかでも『平戸記』は、記主の平経高が実務官人であったことから、叙位・除目に預かった人物を詳細に記す点に特徴があり、幕府御家人の名も多く見いだすことができる。この研究期間においては、『平戸記』に登場する人物がいかなる人物かを特定する人名比定を行うこととした。

3. 研究の方法

本研究においては、研究代表者と研究協力者の8名で研究組織を作り、上記の目的のもと、研究を遂行した。研究組織およびそれぞれの作業分担は以下の通りである。(所属は研究成果報告の時点のものである。)

【研究代表者】

吉江 崇 (京都大学大学院人間・環境学研究科 准教授) <校訂、写本調査>

【研究協力者】

- 岩田 慎平 (愛川町郷土資料館 主任学芸員) <人名・地名比定>
- 生駒 孝臣 (花園大学文学部 専任講師) <標柱作成>
- 大島 佳代 (奈良女子大学大学院 大学院生) <人名・地名比定>
- 高 正樹 (京都教育大学附属高等学校 教諭) <標柱作成>
- 斎木 涼子 (奈良国立博物館学芸部 主任研究員) <校訂>
- 曾我部 愛 (摂津市史編纂嘱託員) <標柱作成>
- 丹生谷 哲一 (大阪教育大学 名誉教授) <校訂>

研究期間の前半である平成28年度、平成29年度においては、研究代表者・研究協力者が1ヶ月に1回程度、校訂会を開催し、唯一の古写本である伏見宮本を用いた校訂作業を全員で実施した。後半にあたる平成30年度、令和元年度においては、作業分担を明確に定め、おのおのの作業を遂行することとし、4ヶ月に1回程度、会合を持ち、各担当部分の進捗状況の確認や、作業を遂行する上で発生した諸問題の検討などを行った。

4. 研究成果

鎌倉時代史研究の基本的文献である『平戸記』について、信頼に足る新訂本を作成することを目的とした本研究では、研究期間において唯一の古写本である伏見宮本9軸を用いた校訂を終えたほか、写本調査に基づく『平戸記』の写本系統の解明、新訂本の底本・対校本の確定、部類記などに引載された逸文の集成、日次記の前半部分である延応2年正月から寛元2年3月に關する校訂、標柱作成、人名・地名比定を終了した。ここでは、写本系統と新訂本の底本・対校本、逸文の内容を適記する。

(1) 『平戸記』の写本系統

『平戸記』の日次記に関する写本系統は、以下の7種に大別できることが判明した。

- A種** 唯一の古写本である伏見宮本とその書写本の東山御文庫所蔵靈元院書写本。
- B種** 万治4年(1661)に焼失した「禁裏御文庫本」の副本である東山御文庫所蔵後西院書写本。  
A種とB種は重複する年紀がなく、またA種とB種を合わせると現存写本(日次記)の全ての年紀をカバーすることとなる。(表2参照)
- C種** B種の後西院書写本のうち、延応2年7月、仁治元年閏10月を除く箇所を写した東京大学史料編纂所所蔵中院本およびそれと同じ構成をもつ写本群。  
全てあるいは一部に中院本と同じ奥書(中院通茂)を有する。

延応2年(1240)	<u>正</u>	<u>2</u>	<u>4</u>	<u>7</u>	<u>11</u>	<u>12</u>						
仁治3年(1242)	<u>正</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>5</u>	<u>6</u>	<u>8</u>	<u>9</u>	<u>10</u>	<u>11</u>	<u>12</u>	
寛元2年(1244)	<u>正</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>5</u>	<u>6</u>	<u>7</u>	<u>8</u>	<u>9</u>	<u>10</u>	<u>11</u>	<u>12</u>
寛元3年(1245)	<u>正</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>5</u>	<u>6</u>	<u>7</u>	<u>8</u>	<u>9</u>	<u>10</u>	<u>11</u>	<u>12</u>

一重線：A種 二重線：B種  
は閏10月を示す

- D種 C種の構成に仁治元年11月、仁治3年3月を加えた構成をもつ写本群。  
 - 1 : C種の中院本と同じ奥書を有するもの。  
 - 2 : C種の中院本と同じ奥書を持たないもの。
- E種 C種の構成に仁治3年3月を抄出の形で加えた構成をもつ写本群。  
 - 1 : C種の中院本と同じ奥書を有するもの。  
 - 2 : C種の中院本と同じ奥書を持たないもの。  
 - 1 : 仁治元年12月の末尾に「比校」と記すもの。  
 史料大成の底本である秘閣本(修史局編纂)がもとにした流布本。  
 - 2...仁治元年12月の末尾に「比校」と記さないもの。
- F種 E種の構成に寛元2年正月、4月、11月・12月を加えた構成をもつ写本群。
- G種 E種の構成に仁治元年11月を加えた構成をもつ写本群。

(2) 『平戸記』新訂本の底本・対校本の選択

写本系統が上記の7種に大別できることに鑑み、それぞれの種で基本となる写本を底本・対校本に選択した。ただし、F種には善本と呼べるものを見出せなかったため、対校本には採用しなかった。

【底本】

- ア 宮内庁書陵部所蔵伏見宮本(A種) 伏-455 9軸  
 ...南北朝期の書写と目される唯一の古写本。
- イ 東山御文庫所蔵後西院書写本(B種) 勅封9-9 19冊  
 ...後西天皇が承応3年(1654)に即位した後に作成させた「禁裏御文庫」などの副本。全ての冊に「明暦」の印記を持つ。  
 アとイは重複する年紀がない。これを合わせると全ての年紀をカバーすることになることから、イの親本はアと兄弟本にあった可能性が高い。

【対校本】

- ウ 東山御文庫所蔵靈元院書写本(A種) 勅封9-10 9冊  
 ...靈元天皇の命によって伏見宮本(ア)を写し、靈元天皇が外題・扉題を付して校合を行ったもの。
- エ 陽明文庫所蔵本(D種) A3-8 19冊  
 ...近衛家熙(1667-1736)が記した外題を持つ写本。
- オ 東京大学史料編纂所所蔵中院本(C種) 6-貴-7 17冊  
 ...中院通茂が「官本(イ)を借り受けて作成した書写本。書写は、寛文元年(1661)6月と寛文元年(1661)12月から2年2月の2期に分けてなされる。
- カ 宮内庁書陵部所蔵松岡本(E種) 207-612 9冊  
 ...松岡辰方(1764-1840)の旧蔵本。
- キ 静嘉堂文庫所蔵田中頼庸旧蔵本(G種) 75-67 8冊  
 ...田中頼庸(1836-1897)の旧蔵本。仁治元年7月16日条(改元記)が存在。
- ケ 国立公文書館所蔵裏辻家旧蔵本(E種) 162-57 5冊  
 ...裏辻家旧蔵本。仁治元年7月16日条(改元記)が存在。

(3) 『平戸記』逸文の内容

下記の部類記などに『平戸記』の逸文が含まれていることが判明した。

- a. 諸院宮御移徙部類記(宮内庁書陵部所蔵伏見宮本)  
 ...建久7年12月、建久8年3月  
 『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記』所収。史料大成本には引載なし。
- b. 仙洞御移徙部類記(宮内庁書陵部所蔵伏見宮本)  
 ...建仁3年11月、元久2年12月、建保2年12月、嘉禄2年8月、寛喜2年8月  
 『図書寮叢刊 仙洞御移徙部類記』所収。史料大成本には引載なし。
- c. 執柄一位拝賀記(宮内庁書陵部所蔵九条本。)  
 ...建仁4年正月  
 新出。鎌倉期書写。
- d. 改元部類記(宮内庁書陵部所蔵柳原本ほか)  
 ...嘉禄3年(安貞元年)12月  
 史料大成本に引載。
- e. 改元部類記(宮内庁書陵部所蔵柳原本ほか)  
 ...安貞3年(寛喜元年)3月  
 史料大成本に引載。
- f. 即位部類記(宮内庁書陵部所蔵柳原本)  
 ...寛元4年2月、3月  
 史料大成本に引載。
- g. 公卿補任(尊経閣文庫所蔵山科家旧蔵本ほか)  
 ...寛元4年3月  
 史料大成本に引載。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉江崇	4. 巻 278
2. 論文標題 陣定の成立に見る公卿議定の変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヒストリア	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉江崇	4. 巻 129-2
2. 論文標題 書評 佐々木恵介著『日本古代の官司と政務』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 82-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉江崇	4. 巻 56
2. 論文標題 古記録の翻刻と写本の系統調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国史研究室通信	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉江崇	4. 巻 11
2. 論文標題 自著を語る 日本古代宮廷社会の儀礼と天皇	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 かりん	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉江崇	4. 巻 53
2. 論文標題 平安貴族の往還と深草地域	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 桃山歴史・地理	6. 最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉江崇	4. 巻 126-5
2. 論文標題 古代 五	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉江崇	4. 巻 952
2. 論文標題 今正秀 摂関期の政治と国家	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 49-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉江崇
2. 発表標題 物部守屋の討滅と八尾 『四天王寺縁起』を読み解く
3. 学会等名 『新版八尾市史 古代・中世史料編』を読む会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉江崇
2. 発表標題 中世公家の伝領と吉田地域 勸修寺家本『御遺言条々』を中心に
3. 学会等名 京都大学総合博物館 平成30年度企画展関連講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉江崇
2. 発表標題 由義宮・由義寺・西京に関する予察的考察
3. 学会等名 古代寺院史研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉江崇
2. 発表標題 道鏡の権威・権力と由義宮の造営
3. 学会等名 八尾市志紀図書館読書週間講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 市史編纂委員会・市史編集委員会（吉江崇・仁木宏監修）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八尾市	5. 総ページ数 633
3. 書名 新版八尾市史 古代・中世史料編	

1. 著者名 吉江崇	4. 発行年 2018年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 366
3. 書名 日本古代宮廷社会の儀礼と天皇	

1. 著者名 栄原永遠男ほか編（吉江崇著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 735
3. 書名 東大寺の新研究2 歴史のなかの東大寺	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岩田 慎平  (Iwata Shinpei)		
研究協力者	生駒 孝臣  (Ikoma Takaomi)		
研究協力者	大島 佳代  (Oshima Kayo)		



## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	高 正樹  (Kou Masaki)		
研究協力者	齋木 涼子  (Saiki Ryoko)		
研究協力者	曽我部 愛  (Sogabe Megumi)		
研究協力者	丹生谷 哲一  (Niunoya Tetsuichi)		